「コンクリートの時代」「現代日本の開化」を読み、そこに私は、共通した問題提起として日本人の安易さへの批判を感じた。

「コンクリートの時代」では、効率よく箱物を生産できるコンクリートに安易に飛びつく建築の浅薄さを、「現代日本の開化」では外発的な西洋の様式を無批判に取り入れる精神の悲惨さを、それぞれ嘆き、問題視している。

この安易さを現代の問題と関連づけると、例えば選挙の投票に関し、よく考えないまま「知名度」や「印象」で投票する行為などは、未成熟な日本を象徴する「相変わらず」の事例として、共通するのではないか。

私は一八歳になり、この夏、初めて国政選挙の投票に行った。投票日の少し前、新聞に選挙区の候補者によるアンケートの回答一覧が掲載されていた。私はそれを父と二人で眺めながら二十数名の候補者一人一人に〇×△をつけ、自分の考え方に最も近い候補者を選んだ。「対露制裁」「日中関係」「核保有・核共有」「原発」「憲法九条」など、質問項目は二五項目にわたった。がく然としたのは、×をつけた候補者がとても多かったことだ。

この話を学校で友人に振ってみたが、関心は示してもらえなかった。残念だった。なんとなく、漱石の「神経衰弱」のいわんとしていることが体感できた瞬間でもあった。これだけ不条理がうごめく世の中なのに、なぜそこまで安易に今を受容し続けられるのか納得がいかない。

安易さといえば、今日のデマが拡散する現象もその一つであろう。新型コロナウィルスに関しても、初期にはずいぶん多くのデマが流れた。かつて江戸時代に感染症が流行した時に、同じようにデマが流布したという。

しかし、武士や商人など学問のある人々はそのような流言飛語に惑わされることが少なく、冷静であったという。安易に流されないためには学ぶことが必要なのである。

日本という国にまっとうな個人主義、民主主義が定着するには、このような安易さと向き合うことが重要だろう。しっかり考えて判断できる人をつくる。それにはまっとうな教育が必要なことは言うまでもない。